

空

平成29年10月31日発行

第15巻5号

通巻第75号

空



2017・10・11

SORA 75号

鈴 虫

柴 田 佐知子

草刈られ川見えてくる孟蘭盆会

一粒の黒は牛なり大花野

壺になる土を運べり鴟の昼

秋風や身丈の低き道の神

落人に重なつてゐる溪紅葉

寺の屋根翔ちて雀は蛤に

なきがらに祭壇の菊うねりけり

菊の香や綺羅なす僧が屍へと

遠目して語るふるさと秋の風

桔梗や神まかせなら寧からむ

菊枕縫ひあげ迷ひ断ちにけり

栗をむく山踏む音を思ひつつ

ふくよかな母の白髪月を待つ

鈴虫の籠を遠くに置き眠る

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

神籬は水の暗さや花茨

息荒き一と日終りぬ水中花

草を食む大地の歪み雲の峰

明け易し夢の続きを創りもし

太陽の埃もたたむ日傘かな

ガスタンク空に嵌れる野分晴

殺さるる情婦美し夏芝居

鰻屋のうの字よく肥え土用入

三度目も許してしまふ暑さかな

襖絵の唐子遊べる稲穂風

地球ごと揺れてゐるなり浮輪の子

送り火を焚くや坐りし日本犬

遠泳のなす術もなき倒れやう

走馬燈昔の闇を廻りけり

昼寝覚世間の音の戻りくる

風涼し金剛力士剣捨てよ

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

ローランサンの馬はももいろ南風

ローリエの一葉を鍋にみどりの日

天の川猫を他人に譲りし日

フルートの音にぼうたんのふとゆるる

ほうたるも闇も怖しと赤子泣く

母の恋知りたかりしよ青葉木菟

ヘッドホン外し乗りたる螢舟

サイダーと賢治好みの音楽と

玻璃戸より猫の見てゐる梅雨の蝶

虎の目のギヤマンひかる半夏生

田水沸き神父と信徒いさかへり

天道虫消ゆ日輪のまぶしさに

天国地獄煉国巡つて昼寝覚め

金魚泳ぐ編集室に紙の音

夏惜しむミサオルガンの蓋閉ぢて

心音のひとりひとりや原爆忌

福岡 柴田志津子

百歳にすこし間のある絹扇

子に曳かせ花野の山羊と帰りけり

伝説はおほかた怖し花すすき

応援の声をひとつに秋高し

秋土用対岸に照る倉庫群

臥すひとの窓いつばいに秋夕焼

島々をひきずり秋の入日かな

冬日和もの言ふ鳥に声かけて

福岡 岸 洋子

飾山笠見上ぐ後に退りつつ

神ほとけ山を一つに青葉木菟

吊鐘にこもる溢蚊撞き出せり

滝の前はなれてもなほ声大き

新しき墓を加へて山滴る

天草を足先でよけ天草干す

一杓の真水大事に飛魚洗ふ

海を割る航跡太し土用あい

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

聖堂の重き扉泰山木咲けり

干草の山へきれいな日の沈む

朝月の涼しく残る野外ミサ

オリーブの葉の翻る日の盛

野外ミサの片隅に湧く泉かな

夏惜しむ太平洋へ石を投げ

受難図の絵硝子に差す緑かな

おのづからまぶた閉ぢをり滝の前

聖堂の足踏みオルガン百合白し

墓石の涼しき人でありしかな

夏蝶の高し耶蘇名の墓を越え

犬搔や水平線をすぐそこに

十字墓のはたては海や立葵

いつしんに門扉を掴み蟬の殻

聖鐘や六月白き木々の花

盆の雨柞の山を濡らし過ぐ

福岡 角野良生

千里なほ飛び足らぬかに初燕
かばかりの田にこれほどの余り苗
かるの子十羽魔法の糸でつながれて
黒潮の黝より鰹ごぼう抜き
在ふにあぢさゐ彩を捨てにけり

東京 山田正子

見し螢胸に点して帰りけり
河鹿笛森は睡りに入りけり
流しさうめん水忙しく流れけり
七夕竹願ひ多くて撓ひけり
青竹のやうな少女の藍浴衣

千葉 原友子

扇がれて酢飯かがやく半夏生
麦星やたつぷり使ふ化粧水
枝払ふ昨夜の雨滴に顔打たれ
茄子きうり休まず太り農休日
歩幅には合はぬ飛び石畳干す

熊本 松田明子

ちちははと入るつもり墓洗ふ
一日をたたむがごとく水を打つ
水軍の裔の島々雲の峰
地獄絵を辿る回廊蟬しぐれ
台風を待ちて週末使ひ切る

大野城 森 田 明 成

あぢさゐと分からぬまでに刈り込めり

習ひ事に励みし日あり古浴衣

訪ふ人もなき玄関に水を打つ

揚羽蝶影よりかげを放ちけり

空き地みな家庭菜園風かほる

粕屋 吉 田 菫

合戦の跡形もなく芹の花

天近き棚田にまるく田水張る

山に山被さる聖地なすび漬

跪射俑の額に青すぢ夏きざす

界限はむかし闇市冷奴

須 惠 苑 実 耶

夏帽子展望台に押さへをり

血を分けし蚊を打てば散る吾の血も

庭先で貰ふ夕刊立葵

帰宅せる夫に向けぬる扇風機

夏ひと日赤子のごとく食べて寝る

北九州 河 原 敬 子

山道険し蛇見しことを言はず行く

控へ目な皇子の山墓風涼し

炎天や下りて親しき山となる

きつかりし登山の写真みな笑顔

回復力のまだ我にあり青嵐

太宰府 山本 則男

築番を眠りに誘ふ水の音
虫追ひの火に磨崖仏浮かびけり
田を植ゑて外輪山を楯となす
なかぞらは泰山木の花を置く
向日葵の整列といふ怖さかな

福岡 亀井 紀子

一斉に被災の山も蝉時雨
山のもの山に返して夏終る
男手も女手もあり台風禍
長月や順々と風改まる
幻の御赦免船や袴能

糸島 小林 朱夏

水口でもつれてゐたる青みどろ
朝早く発つ子に挽ぎしトマトかな
昼の虫土葬に残る髪黒し
野分あと寝癖の髪のやうな山
名月を合せ鏡の中に見る

福岡 田代 貞香

ひまはりや驚きやすき女学生
迷ひなき鋏の音や松手入
たつぷりと水遊びして祖父と眠る
むくろかと思へばジーと蝉の鳴く
夫の忌や遠花火聞くひとりの餉

福岡 永淵 恵子

船板を使ひし家並南吹く

天牛の斑を引き絞り鳴きにけり

御守りにしたきりつぱな蛇の衣

星仰ぎ星座の話夏季講座

金魚玉寸の小指と指切りす

兵庫 林 徹也

廃校の軋む引き戸や燕の子

廃校の下駄箱バケツ西日濃し

蟻の道竪穴住居へと伸ぶる

紫陽花の雫の中の六地藏

夏帽子膝にバツハのレクイエム

東京 遠山のり子

風運ぶ潮の香りや月見草

神宮の朱きそり橋合歓の花

うら窓を開けて涼風ほしいまま

水中りのみを記して日記閉づ

炎昼の空の蒼さの疎ましき

大阪 井上和子

六月や魚の滑りのたなごころ

三伏や藻の黝々と用水路

鯉の屍を土に葬るや青葉冷

大幹に蔓の巻きつく早梅雨

水飲みて眠られぬ夜や水中花